

再びエジプトの灌漑運営移管に参加して

筆者は、灌漑水利組合の強化を通じて灌漑運営移管を進めようとするエジプト国の技術協力プロジェクトに再度参加することになり、この2014年8月の或る日、再びカイロ空港に降り立ったのである。1年ぶりのカイロは、予想以上に平穏であった。カイロの街並みには、1年前当時のクーデター騒動の混乱はなく、未だに観光客がまばらである以外は、平和な住民生活が営まれているように見える。ホット安堵しながら、灌漑管理移管推進のための研修活動等に係る短期専門家として、約一カ月の現地活動を開始したのである。

先報(AAINews 82号)にも報告したように、灌漑運営移管(WMT: Water Management Transfer)とは、政府の財政難対策として、あるいは大規模灌漑システムの維持管理に苦慮する灌漑農業の改善策として、世界的に進められようとする注目の国家レベル灌漑施策である。ナイル河が地中海に注がれるまでの数百万 ha におよぶエジプト国の平地には、同大河を水源とする灌漑水路網が緻密に施されており、年降水量 30mm (カイロ)に満たない乾燥地を肥沃な農業地帯に変えている。しかし、この大灌漑システムの維持管理には膨大な労力や資金を要するばかりか、利水者自身の協力と参加が欠かせないものであった。しかし、これまでの趨勢では、いつのまにか政府が主導するかたちが定着してしまっていることから、これからは、「利水者を灌漑水利の主體的立場に置き換えよう」とする動きが WMT というわけである。

どうすれば、利水者(ここでは灌漑システムの維持管理主体になり得る農民水利組合)が WMT を受け入れ、こなしていけるようになるか。いずれにしても、灌漑利水に関する技術面のみならず、運営管理面能力の向上が必要であることから、研修・訓練が重要視されているのである。筆者に係るプロジェクトでは、三階層の研修構造(研修実施者を訓練するトレーナーの研修⇒研修実施者への研修⇒灌漑利水者への研修)を構築して、それぞれの研修活動を実施することになっている。今回の現地活動では、「研修実施者への研修」活動の支援を行うとともに、全体の研修システム確立のための技術的協力に係るものであった。現地活動自体は、他の長期専門家の努力や、エジプト側カウンターパートらの協力によって順調に進捗することができた。滞在中には、CUDBAS も実施し、今後の合理的カリキュラ

ム作成を可能とする研修システム整備への道筋がついたと考えている。



研修実施者向け研修

CUDBAS ワークショップ

ところで、実を言うと筆者は、つい最近まで WMT には懐疑的であった。WMT は財政難に苦慮する政府の都合を優先するもので、灌漑利水面でさらなるメリットもない利水農家らの協力は得ら難いだろうと感じていた。現に、「WMT で何の得がある?」と農家に問い詰められて、言葉に窮する政府職員を目の当たりにしている。しかし、エジプト政府が進めてきた念入りな灌漑水利行政の実態を知るにつれ、そちらのほうも行き過ぎではなかったかと感じ始めているのである。

人間は現金なもので、各農家は水不足に悩む当初こそ高いモチベーションに押されて積極的に灌漑水利組合結成へと運動する。一端、灌漑システム整備が成就し水不足リスクが低下してくると、「喉元過ぎた」農家の共同灌漑運営へのモチベーションは冷めはじめ、組合運営活動も低迷し始める。それでは困る政府は、次第に関与や補助を増していく、それが常態化したのが「過剰な政府庇護による灌漑運営」の顛末である。それを進めた政府も反省すべきだが、農家にも言いたい、「もう横着は止めて、自分たちでやれることは自分たちで」と。公共サービス一般も同様に、馴れきってしまうと平常心を失うものである。

右の写真は、エジプト国水資源灌漑省ビルのエレベーターの様子。こんなところにも「エレベーターおじさん」が常勤している。雇用対策?いずれにしても過剰な政府支出である。灌漑行政面も、これに近い過剰な負担が常態化しているのであろう。



(2014年10月松島)